十字軍とジハード　～現代への視座

大清水高校　堀部宏人

一　はじめに

世界史の教員にとって、十字軍を題材とすることは何を今更という感じで、あまり学問的関心をそそられるものではないかもしれない。富山県で農薬散布の代わりに人力で除草するボランティア活動が「草刈り十字軍」と名付けられているように、日本人にもなじみの単語となっているし、実際の授業でも一時間程度であっさりと先へ進んでしまうテーマであろう。

しかし、十字軍という言葉にはいまだ魔力が宿る。二〇〇二年の9・11同時多発テロ事件の黒幕とされたオサマ・ビンラディンはその三年前に「ユダヤ教徒と十字軍に対するイスラーム世界戦線」を結成し、アメリカへのジハードを呼びかけていた。A・マアルーフが『アラブから見た十字軍』の終章で述べているように、この言葉がイスラーム世界では九百年前の歴史用語として受け止められるのではなく、近代以降不条理な侵略をしてきた西洋に対する強い反発心を呼び覚ますのである。同時多発テロ直後の記者会見でブッシュ大統領は「テロ行為に対する十字軍は時間を取ることになるだろう」と表現して物議をかもしたが、決して反イスラームではないが十字軍に肯定的なニュアンスが込められていたからであり、それは歴史的に形成されたいかにも西欧的でキリスト教的な意味での正義や善のための「聖戦」意識を背景とするものだからである。

西欧の聖戦は、個人や集団の権利や財産、名誉などの侵害に対する武力行使や正義の執行にとどまらず、神の命令に従ってなされる熾烈なもので妥協は許されない。十字軍はその一つであり、異教徒に対する攻撃性がきわめて強い。イスラーム世界では信仰と共同体を守るための戦いをジハードと称し、異教徒を殲滅するためのものばかりでなく、貢納を条件にそのままの生活を許す政策も採られた。本来は戦いとは無関係で「目的を達成するための努力」を意味する広い概念である。

さて、今回の発表では、イスラーム世界と欧米では何故捉え方が異なるのかを視野に入れて、十字軍をどのように授業で取り上げているか検討してみたい。

二　世界史授業での扱い

一般に教科書では十字軍は、中世西欧世界が変容する契機とされる。記述内容をまとめてみると次のようなものであろう。

(1) 十字軍の背景と参加者の思惑

一一世紀、マジャール、イスラーム勢力、ノルマンの侵入や移動による混乱が沈静化して西欧封建社会は安定期を迎え、開墾活動により農業生産は増え人口も増加した。都市の出現とローカル商業、遠隔地貿易がさかんになった。一方、カトリック教会の布教活動（黙示録、千年王国、最後の審判等、恐怖心を利用、聖者と聖遺物崇拝など土着の習俗や信仰を巧妙に取り込む）もあってキリスト教が生活に浸透し、農民や民衆にも巡礼熱が高まっていた。

折からセルジューク朝の小アジア進出で圧迫されたビザンツ皇帝アレクシオス一世の援助要請（失地回復のため少数精鋭の傭兵を求めたのであり、六三八年以来ムスリムの支配下にあった聖地イェル

サレムの奪還をめざしたものではない）を受けた教皇ウルバヌス二世が一〇九五年にクレルモン宗教会議で聖地回復の聖戦を呼びかけると熱烈な支持を得た。しかし、こうして始められた十字軍は純粋な宗教的動機を越え、参加者それぞれの動機が複雑に絡み合った世俗的なものとなった。例えば、教皇自身は、叙任権争いで独帝に対抗する「教皇軍」を必要としていたし、あわよくば一〇五四年に分裂した東西教会再統一を狙っていたはずである。長子以外が多い諸侯・騎士たちは、自領では不可能な領地や戦利品の獲得をめざしていた。ほかにも商圏の拡大をめざす北イタリア諸都市、債務帳消しや免罪を期待する農民等々。

（2）十字軍の経過と影響

第一回…北フランス諸侯らがアンティオキアなどシリア地方の要衝をおさえ、聖地を奪還して一〇九九年、イェルサレム王国を建国した。占領時に十字軍が多数のイスラーム教徒とユダヤ教徒を虐殺したことが知られている。やがて聖地守護と巡礼者保護を目的にヨハネ、テンプルなど宗教騎士団が結成された。

第二回…聖ベルナールが提唱した十字軍であったが、ダマスクス攻略に失敗した。教科書にはあまり書かれていない。

第三回…久方ぶりにシリア・エジプトを統一したアイユーブ朝のサラディンが一一八七年にイェルサレムを回復したので、英王リチャード一世（獅子心王）、仏王フィリップ二世（尊厳王）、独帝フリードリヒ一世（赤髭）という豪華メンバーが参戦した。しかし結局は足並みがそろわず、イェルサレム王国はアッコンを拠点に縮小を余儀なくされた。

第四回…全盛期の教皇インノケンティウス三世が提唱したが、海上輸送を担うヴェネツィアの思惑に乗り、一二〇四年にコンスタンティノープルを占領、ラテン帝国を建国した異質なものであった。

第五回…破門中の皇帝フリードリヒ二世が一二二九年にアイユーブ朝スルタンのアル＝カーミルとヤッファ協定を結び、聖地を一時的に回復したが、平和共存は聖戦の邪道とされ理解と支持が得られなかった。これも教科書にはほとんど載らない。

第六回・第七回…仏王ルイ九世（聖王）は目的地をイスラーム勢力の拠点となっていたエジプトに変更、新興マムルーク朝と対決したが破れ病没した。またイスラームの背後に登場したモンゴル勢力に期待を寄せ、ルブルックをカラコルムに派遣した。その後、一二九一年にアッコン陥落して十字軍の歴史は終了した。

十字軍の影響として、教皇の権威が揺らいだこと、没落諸侯が続出し結果的に国王権力が強まったこと、東方貿易が盛んになり都市が繁栄するようになったこと、ビザンツやイスラームの文物が西欧世界に刺激を与えたことなどがあげられる。（以上、約一時間の授業でセンター試験の内容はカバーできる。）

三　授業で留意すること・授業に取り入れたい視点

（1）ヨーロッパからみた十字軍

前項はまさに西欧中心の記述を示したが、いくつかの補足や疑問点がある。例えば、背景について、教会が私闘（フェーデ）を抑えるための「神の平和」運動を促進しつつ騎士のエネルギーを外へ（対異教徒）に向けたとする見方がある。武装巡礼団に贖罪の特権を与え、十字軍を制度化したことがその表れである。また、叙任権闘争など教会改革とキリスト教的浄化の思想の影響を指摘するもの

もある。諸宗教共存の地となっていたイェルサレムから異教徒による汚染を除去しようとする発想である。

第四回十字軍についても、ヴェネツィアの商売敵はジェノヴァであり、コンスタンティノープルでは貿易上の独占的地位を保っていた。むしろ宮廷の内紛に巻き込まれたと見られる。

その影響・評価で言えば、西欧封建社会のキリスト教共同体意識の高揚がみられ、ユダヤ人虐殺など不寛容の姿勢が顕著になったことの方が大きいとする見方があり、ビザンツ帝国・ギリシア正教との相互不信をさらに深めたことのほうが深刻である。文化受容面でも閉鎖的で、窓口になったのはイベリア半島やシチリアで、十字軍の指導者でアラビア語を学んだものはまれであった。

(2) イスラームからみた十字軍

無知で野蛮な「フランク人（ビザンツ＝ギリシア人に対して西欧人をこう表現した）」の侵略が成功したのは、複雑なシリア情勢とイスラーム側の油断と分裂のせいである。セルジューク朝（スンナ派）とファーティマ朝（シーア派）が対立し小領主が割拠する中、暗殺教団が暗躍する状況では、団結して防衛（まさにジハード）することさえままならなかった。単性説やマロン派など土着のキリスト教徒や外来の巡礼者を経典の民として扱ってきたイスラーム教徒には、好戦的な「十字軍」が何者なのかをなかなか理解できなかったともいえる。hurbūal-sal biyya（十字架のための戦い＝十字軍）というアラビア語はオスマン朝時代になって登場する。キリスト教徒に対する寛容は徐々に失われるが、それが「敵意」に変わるのはようやく一九世紀になってからであるということは、ぜひ押さえておきたい。

(3) ビザンツからみた十字軍

ビザンツ帝国は、例えば教父聖バシレイオスが戦争であっても人を殺した兵士は三年間聖体拝領を遠慮するよう定めたように、初期キリスト教の理念に忠実で、異教徒との戦争で倒れた者にも殉教者という名誉は与えず、戦争そのものも平和的外交手段がなくなった窮余の策と捉える風潮があり、十字軍という概念は存在しなかった。

(4) モンゴルの登場

第六回・第七回十字軍の頃にモンゴル勢力の影が及んだ。ジョチ・ウルスがマムルーク朝と連携したのに対抗してフレグ・ウルスはフランスと交渉をもった。イスラーム世界の繁栄の中心がバグダードからカイロに移動したのはモンゴル侵入以後である。（ここまでで授業二時間で目いっぱい！）

(5) その他の十字軍の位置づけ

十字軍を、教皇が贖宥と特権を公表して呼びかけ支援して十字をまとい誓約した男たちを戦闘員とするすべての戦闘（聖地回復が条件でなくてもよい）であるとするならば、十字軍の時代はまだ続く。対異教徒として、ドイツ騎士団の東方植民、イベリア半島のレコンキスタがあげられる。また、異端カタリ派に対するアルビジョワ十字軍、皇帝フリードリヒ二世に向けた十字軍のごとき教皇や国王の政敵にむけられたものもこれに属す。

また、十字軍は贖宥状の始まりでもあった。代人提供や資金援助をした者にも贖宥が認められ、相当の金子を支払えばいったん立てた十字軍参加の誓いを取り消すこともできたのである。

(6) 近代以降の十字軍精神

ヨーロッパ最強の異教集団オスマン帝国に対して一六世紀になっ

ても十字軍の結成が試みられた。しかし、各国がハプスブルク家の勢力拡大を嫌ったこととルターの宗教改革で実現しなかった。エラスムスはキリスト教的要素があるトルコ人に改宗を勧める方が適切と考え、ルターはトルコ人は腐敗したカトリックに対する神の鞭だと述べた。ともに戦うことは世俗の国王の仕事と捉えていたのである。こうした状況の中で、教皇が贖宥を認めた事例はレパントの海戦と無敵艦隊のイングランド出撃であった。さすがに制度化された十字軍は一六九九年カルロヴィッツ条約以降はなくなる。

しかし、形を変えた聖戦意識や浄化の思想は、皮肉なことにピューリタニズムに受け継がれた。神の名のもとにクロムウェルの「聖者の軍隊」がピューリタン革命を推し進めた。その舞台はやがてアメリカへ移った。マサチューセッツでもまじめで浄化主義的な精神は受け継がれ、アメリカ合衆国の精神的支柱に組み込まれていった。それはヨーロッパでヴォルテールやディドロら啓蒙主義者が十字軍思想を狂信的と批判したことと好対照であった。

四　おわりに

教皇グレゴリウス九世宛の報告書から復元されたフリードリヒ二世とアル＝カーミルが結んだ「ヤッファ協定」の大要を示す。

第一条　スルタンは皇帝がエルサレムを統治することを認める。
（ナザレとベツレヘムなども返還する）

第二条　皇帝は神殿の丘を侵してはならない。神殿の丘はイスラームの法に基づきイスラーム教徒が管理する。（イスラーム教徒の　共同体の自治を承認している）

第四条　神殿の丘の威厳と尊厳を敬うキリスト教徒は、神殿の丘へ立ち入ることができる。

第六条　皇帝はスルタンに敵対する勢力に食糧や援軍を提供しない。キリスト教徒やイスラム教徒、いずれの場合も同様である。

第八条　この平和条約に反する行動をキリスト教徒がとる場合、皇帝はスルタンを守る。

何とも驚くべき内容である。敵対感情と宗教的熱狂の中で、十数年の間とはいえ交渉によってエルサレムを回復し、平和共存が実現したことはまさに奇蹟といえる。宗教や理念などとは無関係な利害に基づく外交関係が存在したことは興味深い。

十字軍を題材にキリスト教の非寛容やヨーロッパの文化的後進性を強調（例えば医学）することで、生徒が漠然と持っているヨーロッパ中心の歴史認識をかなり改めることができるはずである。さらに、世界史学習にとどまらず、イスラームとユダヤや欧米との確執など、複数の文化圏の接触と現代に連なる歴史的背景を意識させて、異文化理解・多文化共生の視野へ繋げることもできるだろう。

《参考文献》

木村豊「十字軍」『岩波講座　世界歴史10』　一九七〇
橋口倫介『十字軍～その非神話化』岩波新書　一九七四
S＝ランシマン『十字軍の歴史』河出書房新社　一九八九
J＝タート『十字軍～ヨーロッパとイスラム・対立の原点』創元社・知の再発見双書　一九九三
八塚春児「十字軍」『岩波講座　世界歴史8』　一九九八
山内進『十字軍の思想』ちくま新書　二〇〇三
NHKスペシャル文明への道4『イスラムと十字軍』　二〇〇四